

【第六四回大会を迎えるにあたって】

〳〵〵の礎―加賀・能登・金沢の地域史―

常任委員 会

第六四回（金沢）大会実行委員会

地方史研究協議会は、第六四回（金沢）大会を、二〇一三年一〇月二六日（土）～二八日（月）までの三日間、石川県金沢市において開催する。本会常任委員会および開催地の研究者で組織された大会実行委員会では、大会の共通論題を「〳〵〵の礎―加賀・能登・金沢の地域史―」と決定した。

現在、加賀・能登地域には多くの歴史的景観や行事などが伝わり、その歴史や伝統が加賀と能登の地域を形成する一要素となっている。また、近世に前田家の拠点であった金沢では、歴史や伝統は「加賀百万石」のイメージと重なり合って語られ、県外の人々の間で、伝統都市としての金沢のイメージが広く知られるようになった。その金沢から発信される伝統は、金沢のみならず、現在の加賀・能登地域の地域形成にも少なからず影響を与えているといえよう。今、加賀・能登地域に加えて、金沢という新たな地域がクローズアップされている。

さて、本会で伝統をテーマに掲げた大会は、一九七四年に開催された第二五回大会「地方文化の伝統と創造」まで遡る。この大会では、伝統を所与のものとして把握し、失われていく伝統の保護と創造的継承が議論された。九〇年代前後、いわゆる「創られた伝統」が注目され、近世史や近現代史を中心に、由緒や顕彰などが議論された。由緒や顕彰を伝統のひとつと理解するならば、その伝統を創り、支えた地域とは何かを、改めて地域史の視点から問い直すことができるだろう。

今大会では、地域に残された時間的に古い自明のものとして理解される伝統ではなく、近世や近代に創出され、時間的経過や人々の生活のなかで、形を変えながらも現在に継承されてきたものとしての〳〵〵について、主に焦点をあてていく。地域形成の一要素となる〳〵〵の場としての加賀・能登地域の歴史的特質は何か。〳〵〵の礎となった人々の生活やそれを支える地域は、古代以来どのように変わり、そして〳〵〵が地域をどのように変えていったのか。これらを主たる論点としたい。

金沢をはじめ、加賀・能登地域に伝えられる〳〵〵の多くは、金沢城下を中心にした学問の発達、町人と文人の交流、蘭学の積極的摂取や、藩の産業政策などによって創られ、そのなかには度重なる改変によって原型を失いつつも、継承されてきた

ものがある。中世の金沢御坊、北陸道の要地としての町を基礎とし、近世以後、各地から人々が集まって繁栄を築いてきた金沢は、他地域の伝統を吸収し、そして〳〵〵を発信する場となったのである。大藩であった加賀藩の領域は、明治初年の分割・統合を経て石川県へと再編されていった。その後、石川県の慢性的な経済停滞や金沢の衰退を打破するために進められた殖産興業政策のなかで、工芸や繊維産業などは重要産業と位置づけられた。今もそれらの一部は伝統産業として続いている。また、第四高等学校や第九師団の設置を経て、他地域から金沢へ再び多くの人々が集まっていく。金沢は北陸の拠点として「学都」「軍都」と呼ばれ、新たな〳〵〵や地域像を生み出していたのである。

加賀・能登地域は、古来からそれぞれに特徴をもっていた。古代の両地域は、朝廷のある京からみて辺境の地「コシ（越）」と呼ばれ、朝廷の東北経営を背景にして朝廷と「コシ」の関係は深まり、能登、次いで加賀の立国を迎えた。その一方、加賀・能登地域は東アジアと列島を結ぶ窓口として開かれた地域でもあった。中世では水上交通の発達にともない、地域拠点としての港町が加賀と能登の各地に作られ、日本海域の水運を支えていた。近世に入り、両地域は加賀藩領として一体的に把握された。藩政の展開と地域再編のなかで、金沢が加賀藩の政治・経済・文化の大きな拠点となり、それまでの拠点となっていた七尾や小松などが持っていた政治的機能や役割は変化していったのである。

また、地域再編などの歴史的变化は、近世・近代を経て、古代から存在したはずの地域の歴史的特質を改変させることがあった。たとえば加賀・能登地域は「真宗王国」と呼ばれ、いわゆる浄土真宗のイメージが印象づけられ、それが〳〵〵のひとつとして数えられている。これは近代の教団活動が〳〵〵となる契機のひとつであった。両地域では古代以来、山岳信仰の場である白山や石動山があり、中世には能登国守護による保護を受けた気多社、曹洞宗や日蓮宗勢力なども地域に根ざして活動していた。このような歴史をもちながら、〳〵〵の由緒をもつばら蓮如や一向一揆に求める理由はどこにあるのだろうか。加賀・能登地域の〳〵〵の多くが近世・近代を起点にして考えられているが、加えて古代・中世からその風土や環境に根ざして受け継がれてきた両地域の事象も、〳〵〵の礎として考えてみたい。

加賀・能登・金沢をめぐる〳〵〵は、各時代の地域のあり方や、そこに住み、あるいは他地域から入って活動した人々の生き方、そして地域の変化を通して理解することができる。平成の市町村合併や、北陸新幹線の開通を契機にして、加賀・能登地域では新たな〳〵〵を創り出そうとする動きが生まれつつある。今大会では、〳〵〵が持つ意味、そして〳〵〵を創り出す地域の様相を、加賀・能登・金沢を舞台にした歴史的経緯からとらえ直していく。参加者の積極的な議論を期待したい。